広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第52号　2003　205－213

「ケア」論から成人期の発達をとらえる試み

―アイデンティティ生涯発達論を中心として―

岡　本　祐　子

(2003年9月30日受理)

Some Considerations on the Adult Development from the Viewpoints of Care and Caring

Yuko Okamoto

This paper aimed to discuss the meanings of care and caring for adult development, and the vision to achieve positive development by caring. According to the series of the author's empirical studies of identity development in adulthood, personal identity and care-besed identity had equal weight for adult identity. Both of them played the important roles not only in social and vocational life but also private family life. Adult lives developed in the circulation of identity and care. It was figured out as "The Cyclic Developmental Model of Identity and Care in Adulthood". This model suggested that adult lives developed in the following process: ① Achievement of personal identity, ② Affording the identity to the others, ③ Deep concern and commitment to others (=Care), ④ Achievement of identity of the commited others, ⑤ Consolidation of identity. Furthermore, the achievement of identity of the commited others developed the circulation of the next generation. It was considered that good balance of personal identity achievement and caring was important for adult development.

Key words: Adult Development, Caring, Identity, The Cyclic Developmental Model of Identity and Care
キーワード：成人発達，ケアすること，アイデンティティ，アイデンティティとケアの循環的発達モデル

1．問題および目的

今日，高齢者介護，子育ての困難さなどが社会的にも注目され，ケア役割やケアの質の重要性が改めて問い直されている。そしてそれに呼応して，ケアの心理に関する書物は数多く出版されている。しかしながら，これらの出版物のほとんどは，ケアを受ける側に焦点をあてて，よりよいケアの実践をねらいとしたものである。例えば，国立情報学研究所情報サービス Webcat Plus で，「ケア」と「心理」をキーワードとして検索した結果，ヒットした52冊の書物のうち，ケアの対象者は，高齢者，子ども，障害者，患者，被災者であり，それらはすべて，ケアされる側に焦点化して論じられている。我が国においては，ケアはそのほとんどが，福祉や医療の「実践の学」としてとらえられているのが現状である。

ケアに関する研究の方向性と課題の一つとして，ケアする側に焦点をあて，人間の生涯発達にとってのケアの意味を考察してみることは重要であろう。なぜならば，他者に関心を寄せ，思いやり，支えるケアの営みは，人間が人間らしく存在し，発達していくためには不可欠の資質・行為であり，ケアすることは人間の存在にとって，本質的な意味をもっていると考えられるからである。さらに，人間の生涯発達におけるケアすることの意味を理論化し，位置付けることによって，今日，多発しているケアの危機的状況，例えば，乳幼児虐待，高齢者虐待や燃え尽き症候群（バーンアウト・シンドローム）などの問題への対応にも，臨床心理学

のみならず発達心理学からの適確な貢献が可能であると思われる。

後述するように，人間の存在や発達にとってのケアの意味については，Heidegger, Mayeroff, Erikson, Gilligan, Josselson 等によって考察されてきた。また，ケアの実践については，福祉や医療の領域で数多くの蓄積が見られる。しかしながら，心理学の分野では，ケアに対する関心はそれほど高いとはいえないのが現状である。

その背景としては，次の2点が考えられる。第1は，これまで長い間，心理学研究においては，人間の発達を，自立や，より高い精神機能の達成ととらえ，「個」の発達に焦点化した研究が中心的課題であったことである。このような心理学研究の流れにおいては，長い間，ケアは，人間が健康に発達していくための背景的要因の一つとして考えられてきた。第2は，最近まで自立や分離－個体化は男性的特性，関係性や他者へのケアは女性的特性として理解され，ケアは女性的特質と見なされてきたことである。このようなことからケアは，心理学研究の重要なテーマとしての関心を集めることが少なかったと考えられる。

しかしながら，今日では，ライフサイクルを通じての人間の発達を，単に自立や「分離－個体化」の視点のみでなく，「関係性」の視点からとらえようとする立場が注目されている。さらに，個体発達は男性的特質，関係性やケアは女性的特質という2分法ではなく，いずれの特質も，男女双方の発達にとって不可欠の資質であるという視点が支持されるようになった。しかし，生涯発達的視点からケアする側にに焦点をあてた実証的研究は，まだ十分であるとは言えない。「他者をケアすること」から見えてくる成人期の発達のヴィジョンを考えていくことは重要な課題である。

そこで本論では，ケアを行う側のライフステージである成人期の発達をケアの視点からとらえ直し，成人としての発達にとってのケアの意味と位置づけについて考察する。さらに，ケアする側に対して，プラス・マイナス両方の影響をもたらすケアの営みを，成人としての積極的な「発達」の方向へ促進していくためのヴィジョンについて検討する。

2．「ケア」という言葉の意味

「ケア」(care) という言葉には，多様な意味が含まれている。旺文社英和中辞典によると，“care”という言葉は，名詞では，①心配，苦労，気掛かり，憂慮，②心配事，気掛かりの種，煩わしい事，注意の対象，特に注意を要する事柄・仕事，③注意，用心，配慮，④好み，望み，⑤保護，世話，監督，看護，動詞では，①心配する，関心をもつ，かまう，気にする，②世話をする，看護する，などの意味をもつ。一般的にケアという言葉は，他者に関心をもち，気遣い，世話するという肯定的な意味合いをこめて用いられるが，辞典で最初にあげられているのは，心配，苦労，憂慮といった否定的な意味合いである。このことについて，水野（1995）は，次のような興味深い考察を行っている。「他者が苦悩しているのを見て，近くに寄り添いその苦しみに耳を傾けるとき，他者の苦しみは自己の苦しみになって返ってくる。そのように自分の苦しみとして他者に関わるとき，ケアという行為が開始されたという意味を含んでいるように思われる。すなわち他者の苦悩に関わる援助者が，共苦・共感的関わりを築こうとしないで，他者の苦をいわば効率的な方法で処置するだけだとすれば，たとえ原因を取り除いて苦しみを解消できても，それはここでいうようなケアにはあたらないといえよう。」このように，ケアとは本来，他者の苦悩に共苦共感する関わりを示すのであろう。

また，“care”という言葉には，「人の面倒を見ること」という行為の次元と，「他者に関心をもち，気配りし，慈しむこと」という心理的次元の2つの意味が含まれている。つまり，英語ではだれかの世話をすることを“care for someone”と言い，だれかのことを思いやることを“care about someone”と表現する。ケアの本来の意味からすると，他者の面倒を見るという「行為」にも，他者への共感・配慮の気持ちが働いているはずである。しかし現実の社会の中には，この「ケアする行為」に，「ケアする心」が必ずしも常にともなっているとはいえない場合も少なからず存在する。むしろ，「ケアする行為」と「ケアする心」が乖離してしまう，あるいは乖離してしまわざるを得ないところに，例えば乳幼児や高齢者の虐待，援助者の側の燃えつき症候群など，さまざまな問題が生じているとも考えられる。この点については，6．で考察する。

3．ケアの視点をもつ人間発達論の展望

これまで人間の存在や人生，発達にとって，ケアの重要性を指摘した研究者は，数少ないながらも幾人か見られる。これらの人々の思想と知見については，岡本（1999）において論考したため，ここではその概要のみを記述するにとどめたい。

ケアとは，古くはローマ神話に登場する女神の名前である。哲学者 Heidegger（1927）は，その著書『存在と時間』の中にこの神話を引用して，人間という存

在は，その根源においてケア，すなわち気遣い，あるいは献身によって支配しぬかれていると説いている。自己および他者への気遣いや配慮に生涯にわたって献身することが，人間の本質であることを明らかにしたのである。

人間にとってケアのもつ意味については，Mayeroff（1971）によるすぐれた考察がある。Mayeroff は，ケアについて真正面から取り組み思索を深めた哲学者である。彼は，その著書『ケアの本質』（1971）の中で，ケアすることの特質を説くとともに，ケアがいかに価値を決定し，人生に意味を与えるかを考察している。そこに一貫して流れているケアの精神は，相手の成長を助けることによって自分自身も自己実現をとげていくという考え方である。Mayeroff の思想は，ケアという視点から「人間存在覚醒の水脈」を掘り進んだものであるが，彼の思想を心理学の視点から見直すならば，ケアという関係性の中で，人間は本来もっているポジティブな人間性が発現し，ケアされる側もケアする側も，自己実現を遂げていくととらえることができる。この考え方は，岡本（1997）の「関係性によるアイデンティティの発達」，つまり他者の自己実現を援助することが，すなわち自分自身のアイデンティティの発達につながるというヴィジョンと通じるところが大きい。

ライフサイクルを通じての人間の発達の中に，ケアのテーマを組み込んだ理論を提唱した者は，心理学の世界では，Erikson（1950）が最初の人物である。Erikson は，精神分析的個体発達分化の図式 Epigenetic Scheme の第Ⅶ段階 成人中期の心理社会的課題として，「世代性」（Generativity）をあげている。Erikson は，「健康なパーソナリティの成長の一段階」として世代性をあげ，これを「次の世代の確立と指導に対する興味・関心」と定義している。“Generativity”という用語は，Erikson の造語であり，「生殖性」「世代性」「生成継承性」など，さまざまな訳語が当てられている。本稿では，「世代性」という用語を用いて論ずる。この世代性の概念は，生産性（Productivity）や創造性（Creativity）のようなより一般的な同意語の概念を含む包括的な概念である。これが達成された時に獲得される人格的活力（Virture）はケア（care，はぐくみ）であると Erikson は言う。

他者に対する配慮と責任を成熟した人間の指標と考え，人と人との関係性から心の発達をとらえたものに，Gilligan（1979）の研究がある。Gilligan は，Kohlberg（1981）の提唱した道徳性の発達段階説に対して，道徳性の発達には男女によって異なる２つの道筋があると批判した人物である。Gilligan は，女性を対象に道徳性葛藤や自己のとらえ方に関する面接調査を行った結果，女性と男性とでは，道徳性のとらえ方が異なることを見出した。例えば，Gilligan によると，中絶のジレンマに直面している女性にとって，道徳的問題は他者に配慮し他者を傷つけない義務ととらえられ，他者を傷つけることが〈利己的〉，配慮をすることが〈責任の成就〉とされる。こうして Gilligan は，道徳性には，「正義の道徳性」とは別に，「配慮と責任の道徳性」があり，女性は後者の発達過程をたどると主張した。彼女の研究は，人とのつながりや配慮によって達成される成熟への道筋を示し，後の研究に大きな影響を与えている。

Josselson（1994）は，アイデンティティの発達を関係性の文脈からとらえ直し，人間は，自己実現へ向かう同時に，他者との関係性が分化し発達していくというヴィジョンを示している。Josselson の提唱するアイデンティティ形成にともなう関係性の次元は，８つの段階で説明され，その最も成熟した次元として，慈しみ・ケアがあげられている。ここでいう慈しみ・ケアとは，Gilligan の考え方と同様の，他者に対する感受性豊かな関心，世話することへの責任を意味している。

また，我が国においても，西平（1996）による人格のピラミッド・モデル（XYZ モデル）や P（専心，Priority）-H（調和，Henide）統合型の考え方は注目に値する。西平の健全性 X，高さ・偉大性 Y，深さ・超越性 Z のうちの Z 性，および Henide 型の特性は，ケアの特質をも包含したものである。

このように数は少ないながらも，人間の発達にとってケアの重要性を指摘した知見はいくつか見られる。本稿では，それらの知見をもふまえながら，アイデンティティ生涯発達論の立場から，より具体的に成人期の発達におけるケアの意味と位置づけについて考察してみたい。

４．「アイデンティティ」の発達にとってのケアの意味

アイデンティティそのものの発達・成熟にとって，ケアはどのように位置付けられるのであろうか。Erikson（1950）によって提唱されたアイデンティティ論は，ライフサイクル全体にわたる人間の発達を，総合的，統合的に理解する上で優れた理論である。特に，成人期の発達は，トータルな視点から人間のあり様を理解することが不可欠であるため，アイデンティティ論はきわめて有益かつ重要な理論的枠組みである。

アイデンティティ研究は，１．で述べた他の発達研

究と同様に，その初期には，「自立」「自律」「分離－個体化」といった「個の発達」の視点からの研究がほとんどであった。しかし，1990年代以降，「個の発達」のみでなく，他者との「関係性」もアイデンティティ形成や発達にとって同等に重要であるという視点（Franz & White, 1985；Josselson, 1994；岡本，1997，1999，2002a；杉村，1998，2003）が注目されている。

筆者は，これまでアイデンティティそのものの発達・変容という視点から成人期の発達をとらえてきた（岡本，1994，1997，1999，2002a）。その中核となるヴィジョンは，成人期におけるアイデンティティの発達には，「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」が等しく重要な意味を持ち，両者が互いに影響を及ぼしながら，アイデンティティは発達・深化していくというものである（表1，岡本，1997）。そして，これを生活世界をふまえて表すと，「成人期の発達を規定する2つの軸と2つの領域」（図1，岡本，2002a）としてまとめられる。成人としての成熟性には，達成や自立に象徴される「個としてのアイデンティティ」と，ケアや共生に特徴づけられる「関係性にもとづくアイデンティティ」が等しい重みを持っている。そして，この両者は，職業を中心とする公的領域においても，家庭生活を中心とする私的領域においても，重要な資質であり，「成人」としての発達・成熟は，両者のバランスと統合が大きな意味をもっていると考えられる。

アイデンティティの生涯発達プロセスを見ると，成人期においても，中年期，現役引退期などの人生の転換期には，アイデンティティそのものの問い直しと再構築が行われる。この「アイデンティティの再体制化」において，「自分の生き方はこれでよいのか」「私は，納得できる自分らしい生き方をしてきたか」というアイデンティティそのものに対する「問い」のみでなく，「個としての自分」と「他者とのかかわりにおける自分」のバランスもまた，問い直されるのである（岡本，2002a）。特に，成人期の人生においては，このバランスそのものが「自分らしい生き方」，つまりアイデンティティの特質を決定しているといってもよいであろう。

このように成人期のアイデンティティ発達をとらえると，「ケア」は，発達の2つの軸および2つの領域の一つを支える重要な位置を占めていると考えられる。

5．「世代性」にとってのケアの意味

成人期の発達を考察するためには，Erikson（1950）が，成人中期の心理社会的課題として挙げた「世代性」は重要な鍵概念である。アイデンティティそのものの発達という視点から見た成人期の発達に関する筆者の知見を，「世代性」の視点から見直してみると，どのようなことが考えられるであろうか。

「世代性」が達成されるための特質として，第1に，

表1．成人期のアイデンティティをとらえる2つの軸（岡本，1997）

	個としてのアイデンティティ	関係性にもとづくアイデンティティ
中心的テーマ	自分は何者であるか 自分は何になるのか	自分はだれのために存在するのか 自分は他者の役にたつのか
発達の方向性	積極的な自己実現の達成	他者の成長・自己実現への援助
特徴 （山本，1989による）	1．分離-個体化の発達 2．他者の反応や外的統制によらない自律的行動（力の発揮） 3．他者は自己と同等の不可侵の権利をもった存在	1．愛着と共感の発達 2．他者の欲求・願望を感じとり，その満足をめざす反応的行動（世話・思いやり） 3．自己と他者は互いの具体的な関係の中に埋没し，拘束され，責任を負う
相互の関連性・影響	①個としてのアイデンティティ⇨関係性にもとづくアイデンティティ ・他者の成長や自己実現への援助ができるためには，個としてのアイデンティティが達成されていることが前提となる。 ・他者の成長や自己実現への援助ができるためには，常に個としてのアイデンティティも成長・発達しつづけていることが重要である。 ②関係性にもとづくアイデンティティ⇨個としてのアイデンティティ ・他者の役に立つことから体験される自己確信と自信。 ・関係性にもとづくアイデンティティの達成により，生活や人生のさまざまな局面に対応できる力，危機対応力，自我の柔軟性・しなやかさが獲得される。	

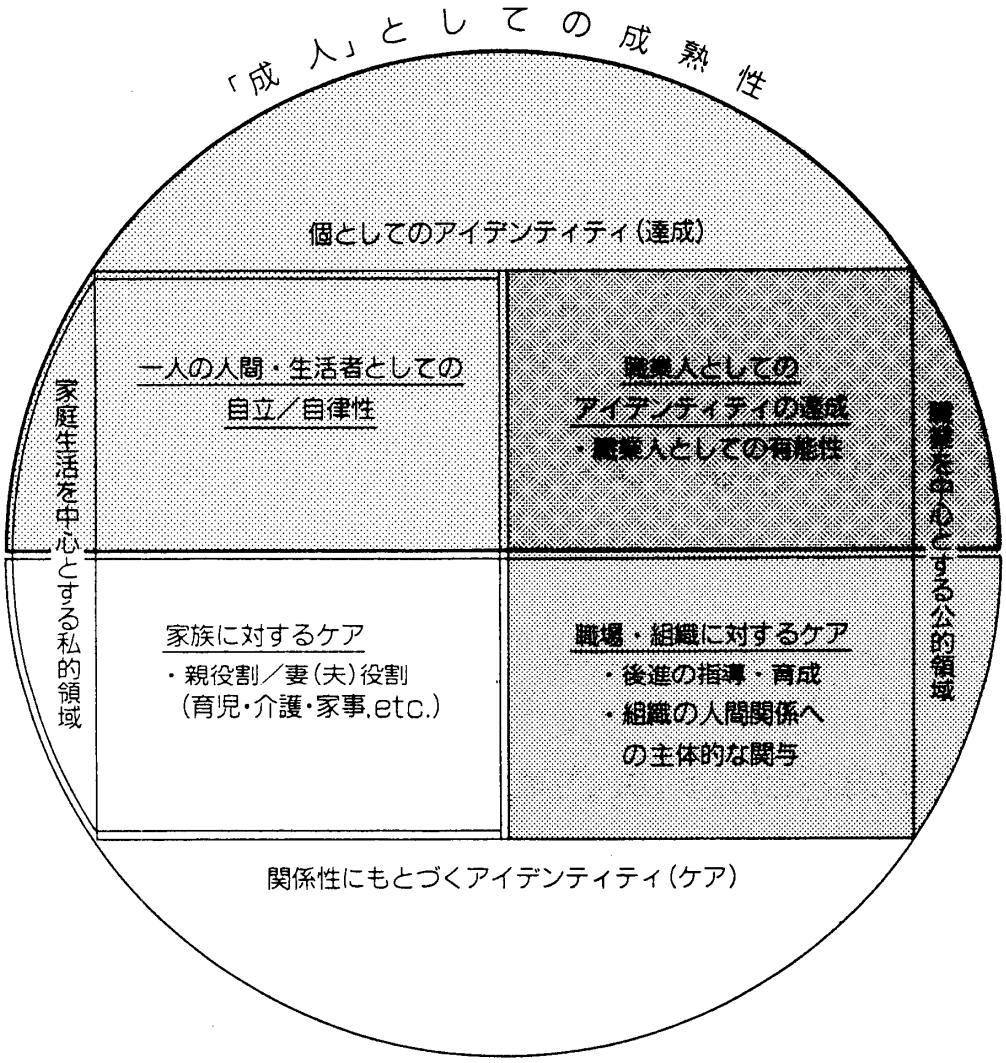

図1．成人期の発達を規定する2つの軸と2つの領域（岡本，2002a）

確立されたアイデンティティの外在化，つまり他（者）へのアイデンティティの投企，第2に，無我性，つまり自己中心的でない他者への関心と関与，が不可欠の要素であると考えられる。世代性とは，達成された自らのアイデンティティでもって他者を支え育てることである。この「他者」，特に次世代に対する深い関心や関与なしに行われる生活や行動は「自己陶酔」に過ぎないとErikson は言う（Erikson, 1964）。この「世代性」に，筆者の「個としてのアイデンティティ」，「関係性にもとづくアイデンティティ」，そして「ケア」はどのように位置づけられるであろうか。

図2は，「成人期における『アイデンティティ』と『ケア』の循環的発達モデル」である。この図に示したように，筆者は，「アイデンティティ」と「ケア」は循環しながら，成人期の人生は展開していくと考える。

この「成人期におけるアイデンティティとケアの循環的発達モデル」を，説明しておきたい。一般にアイデンティティは，自分の生き方・職業・価値観等の主体的な模索と意志決定によって，青年後期に獲得される。この達成されたアイデンティティは，何者（物）かに積極的に関与することによって，さらにしっかりとしたものに確立されていく。つまり，成人期には，自ら確立したアイデンティティでもって他（者）を支えるという「他（者）への投企」が不可欠である。この「他（者）への投企」が行われる時，「関係性にもとづくアイデンティティ」が形成される。この場合の「他者」は，必ずしも特定の他者（人間）ばかりでなく，集団・組織，あるいは事業，作品や物であることも少なくない。多くの人々は，その他（者）に対して深い関心と積極的関与を持続させていく。筆者は，この営みこそ「ケア」であると考える。そして，積極的に関与した対象が，成長をとげ，完成された時，「世代性」は達成されるであろう。それは，ケアした対象の成長・自立であったり，組織・事業・作品の完成であったりする。そのことはまた，ケアする側のアイデ

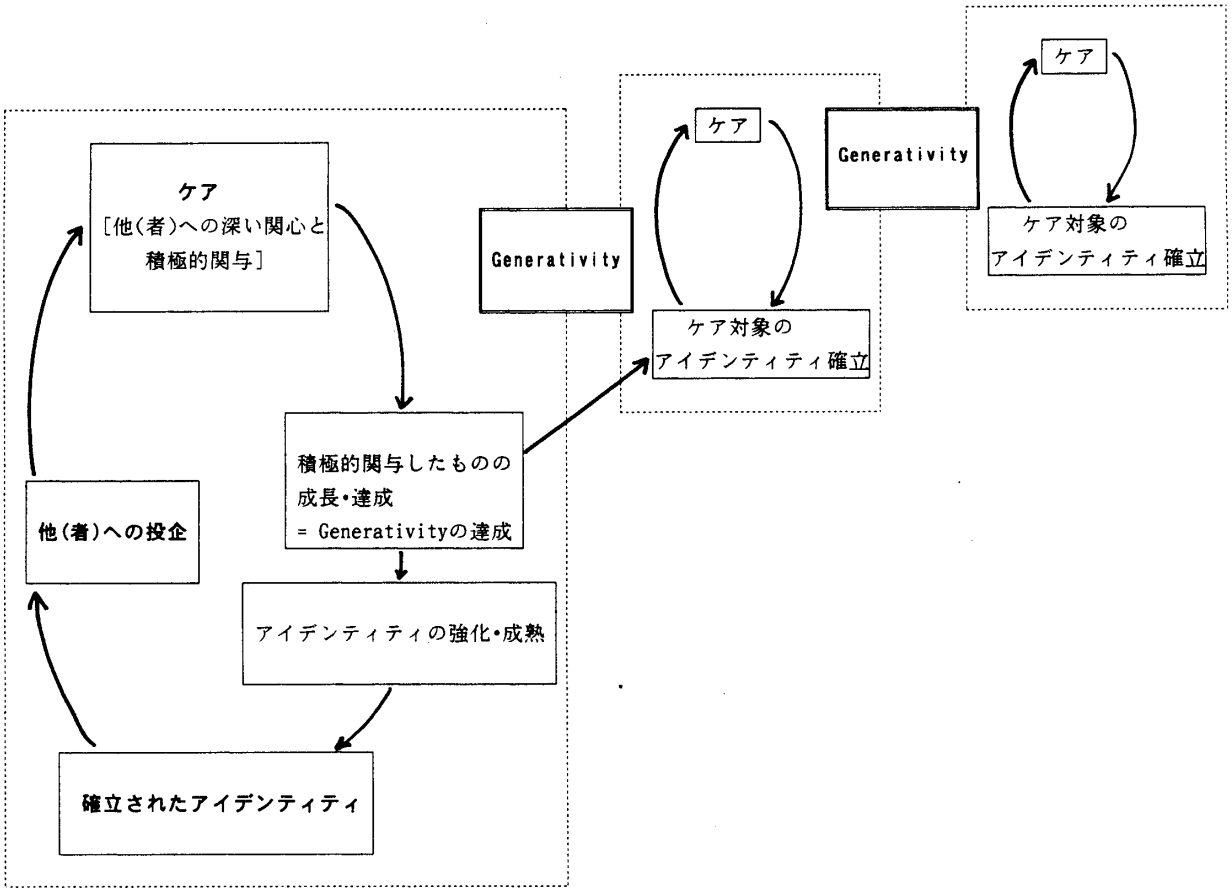

図2．成人期におけるアイデンティティとケアの循環的発達モデル

ンティティの強化や成熟・深化をもたらし，さらなる「他（者）への投企」を促進するであろう。つまり，成人期の発達は，この「確立されたアイデンティティ」→「他（者）への投企」→「ケア〔他（者）への深い関心と積極的関与〕」→「積極的関与した対象の成長・達成」→「アイデンティティの強化・成熟」という循環を繰り返しながら進展していくと考えられる。また，ケアされることによって達成されたアイデンティティは，自立した次世代を形成し，次の循環を展開させていくのである。

このように考えると，ケアする側に焦点を当てた成人発達研究は，この循環を促進または阻害する要因は何かという問題が重要な課題となる。

6．ケアすることによる発達を促進するためのヴィジョン

ケアすることによるケアする側の発達については，少ないながらも，ここ10年余の間にいくつかの重要な実証的研究が発表されている。特に，親となることによる親の人格的発達の研究（柏木，1995；牧野，1996），障害児を持った親のわが子の受容プロセスの研究（Droter, 1975；柚木，1985；牛尾，1998），老親の介護体験による老いと死の受容プロセスの研究（岡本，1997）などは，ケア役割を担うことによって，ケアする側が人格的に成長・発達していくことを実証的に示した研究として重要である。

これらの研究によって示唆されているように，ケアすることによって人格が成長・発達していくことは事実であろうが，現実の社会を見ると，ケアする行為に関わる否定的な局面も頻繁に見受けられる。例えば，育児・介護ストレスや，乳幼児・高齢者虐待，あるいは看護師や教師，介護者の燃え尽き症候群などは，その一例である。ケアは，「両刀の剣」的特質を有している。しかしながら，このようなケアに関わるマイナスの側面，つまりケアすることによる発達を阻害する要因に関する研究によって，ケアによる発達のメカニズムをより明確にすることは可能であろう。ここでは，ケア役割を担うことから生じる否定的な現象・要因の研究を概観し，ケアによる発達を促進するためのヴィジョンについて考察する。

(1) 子育てに関わる意識・感情の研究

子どもを育てることは，決して「子どもはかわいい」

「子育ては生きがいだ」といった肯定的な感情ばかりでなく，子育てにともなう制約感など，さまざまな否定的な感情も同時に体験されている（大日向，1988；柏木，1995）。柏木（1995）は，幼児を育てている母親・父親を対象に，子育てに関わる意識・感情を分析し，①肯定感（子どもは心の支えだと思う。育児は楽しい，など），②制約感（育児のために社会からとり残されていくように感じる。親であるために自分の行動がかなり制限されているように感じる，など），③分身感（子どもは自分の分身だと思う，など）という3因子を見出した。制約感は，子育てにともなう否定的な感情であるが，これは，夫の育児の分担・協力が高いほど，有意に低くなることが指摘されている。

(2) 親役割を担うことによるアイデンティティ葛藤

少子高齢社会の到来が女性の生き方に及ぼす影響を，アイデンティティ論の視点から展望してみると，そこにはいくつかの共通したテーマがうかびあがってくる。その中心的な問題は，成人初期や中期においては，母親役割だけでは自分を支えきれないというアイデンティティ葛藤であり，成人後期においては少ない子どもが親の長い老後を看取ることによって生じる，介護役割が個としてのアイデンティティを圧倒してしまうという，もうひとつの葛藤である。いずれもケア役割を担うことが，ともすれば個としてのアイデンティティに大きな脅威を与えかねないという現象である。

岡本（1996）は，子育て期の女性のアイデンティティ様態を，個としてのアイデンティティと母親アイデンティティという2つの次元からとらえ，子育て期の女性のアイデンティティ葛藤と統合のあり方，および家族関係に見られる特徴の関連性を検討している。その結果，表2のような4つのタイプが見出された。表2に示したように，子どもをもつすべての女性が母親であることを受容し，自分のアイデンティティの中に統合しているわけではない。特にⅣ未熟型は，母親であることの不適格感や母親役割を否定する傾向が強い。Ⅲ独立的母親型は，子育てに対して否定的，消極的であり，母親であることに対してアンビバレントな感情が強く，葛藤状況にある。また，これらの4タイプにおいて，夫の育児・家事の実際的な協力度には有意差は見られなかったにもかかわらず，Ⅰ統合型の女性は他のタイプに比べて，夫への信頼感が有意に高く，夫からの理解の程度も最も高く認知していた。この結果は，女性のアイデンティティ統合や母親アイデンティティの達成には，夫をはじめとする他者のサポートが重要な意味をもつことを示唆するものであろう。

表2．アイデンティティ様態の4タイプ（岡本，1996）

タイプ	個としてのアイデンティティ達成度	母性意識の高さ	人数
Ⅰ 統合型	高	高	47
Ⅱ 伝統的母親型	低	高	35
Ⅲ 独立的母親型	高	低	30
Ⅳ 未熟型	低	低	35

(3) 育児や介護によるアイデンティティの閉塞

今日では，乳幼児虐待は，特殊な母親だけが体験するものではなく，一般的な普通の母親も「子育てはつらい」「我が子がかわいく思えない」などの気持ちをもつことが，日常茶飯にあることは広く知られるようになっている（金沢，1993）。

武田（1998）は，乳幼児虐待，我が子いじめをしてしまう母親の相談事例の分析から，その背景にある問題として，母親の自己喪失感，不慣れな子育て，子どもがうまく育たない，人間関係がうまくいかない，という4つの点をあげている。中でも第1の問題である母親の自己喪失感は，アイデンティティのテーマに深く関わる問題である。自分自身や自分の生活への評価の低さ，不満のうち，最も大きいものは，「喪失」に対するものであると，武田は述べている。つまりそこには，子どもを産んだこと，母親になったこと，育児中心の生活になったことによって，これまで自分自身が価値をおいていたものが失われていくことからくるいらだちが存在する。このことは，母親役割をになうことによって，「個としてのアイデンティティ」が閉塞してしまったことを示しているのではないであろうか。

高齢者介護についても，同様のことが報告されている。厚生省の調査（1996）によると，高齢家族の介護者の介護負担感のうち，食事や排泄，入浴などの世話そのものに対する身体的な負担感は57.5%にものぼっているのをはじめ，ストレスや精神的負担，家を留守にできないなどの拘束感もかなりの割合を示している。さらに，介護を手伝ってくれる補助者がいると回答した者は，約半数にすぎない。このような1人の家族が介護の責任を全面的に任されるという事態は，ともすればアイデンティティの崩壊を生じさせることにもなる。つまり，介護者になったものが，介護役割に自分の全生活を奪われ，社会人としての生活や個としてのアイデンティティが喪失してしまうということである。このような状態は，介護役割によって個としてのアイデンティティが喪失してしまうことを意味している。

(4) 「循環的発達モデル」からみたケアすることによる発達を促進するためのヴィジョン

それでは，これまで概観してきたようなケア役割を担うことから生じるマイナスの現象・要因をプラスの発達の方向に転換するためには，どのようなヴィジョンが必要であろうか。筆者は，次の2点が重要なポイントであると考える。第1は，循環的発達モデルで示した「アイデンティティ」と「ケア」の間の循環がうまく展開していくことであり，第2は，その発達促進的循環がうまく進むためには，図1の「個」と「関係性」のバランスがうまくとれていることである。この2つの問題は，表裏一体のものである。これまで紹介してきたケア役割を担う側の否定的な意識・感情に関する研究を詳細に検討すると，これを支持する知見がいくつも見出される。

第1に指摘されるのは，子育てによる制約感を低下させるためには，父親をはじめ，家族のサポートが大きな意味を持っているということである。例えば，「個としての自分」と「母親である自分」のバランスがとれ，統合されている母親は，夫への信頼感，夫から理解されているという認知が有意に高い（岡本，1996）。また，乳幼児虐待ホットラインに対する相談件数は，週末の金曜日，土曜日にはかなり減少するという報告も見られる（武田，1998）。武田は，これを，明日は夫が家にいてくれるという安心感が虐待を抑制しているのではないかと考察している。

第2は，「個としての自分」が確認できることの重要性である。例えば，牛尾（1998）の研究は，障害児をもった母親がわが子を受容していくプロセスを明確化している。それは次のような特徴をもっている。わが子に対しては，障害児であることがわかったごく初期の段階の「拒否・不信」の段階から，「過度の密着」の段階，「適切な距離がとれるようになり，肯定的な受容」ができる段階，そして，「あるがままの受容」の段階へと変化している。この段階に至ると，親の側の成長・発達感も体験され，子どもへの感謝の意識も自覚されている。また，社会に対しても，最初の「拒否・不信・ひきこもり」から「受動的な関わり・援助を求める」段階へ，そして「積極的・主体的な関わりがもて，同胞や社会に援助」する段階へと展開している。これはまさに，母親の子どもおよび社会との「関係性」の深化のプロセスとして理解することができる。ここで重要なのは，母親がこの受容プロセスの中で，「自分自身の楽しみを確保」しているということである。つまり，四六時中，「○○ちゃんのお母さん」でいなくてもよい――母親が「個としての自分」にもどり，充足することによって，自己の主体性が回復し，アイデンティティが強化される。そしてこのことが，ひるがえって我が子へのケアの質を高めると言えよう。

さらに，日本と中国の母親の子育て意識に関する日中比較研究（岡本，2002b）も，興味深いデータを提供している。子育てに対する意識は，中国人の母親は日本人の母親に比べて，肯定的な感情は有意に高く，否定的な感情は有意に低かった。我が国も中国も，その背景は大きく異なるが，いずれも少子化が進んでおり，両国とも我が子への思い入れは相当強い。それにもかかわらず両国のこの相違は，中国人の母親はそのほとんどが有職であり，仕事という子育て以外の世界をもっていることに関連するのではないであろうか。

これらの研究より，循環的発達モデルがうまく展開するためには，「個としてのアイデンティティ」の確立・確認・充足が，ケアの前提として大きな意味をもっており，さらに，個とケアのバランスがうまくとれていることが重要であると考えられる。さらにこの個の確認・充足とケアは，図1に示したような2つの軸と2つの領域におけるバランスが極めて重要であろう。

7．今後の課題

ケアの生涯発達に関する研究は，現在，その途についたばかりである。ケアを軸とした生涯発達論を構築していくための研究の方向性としては，次の2つが重要な柱となるであろう。第1は，子育て，高齢者介護など，ケアに関わる事象にもとづく「ケアすることによる発達」の特質，および「ケアによる発達」の促進・阻害要因の分析など，社会における現象や問題を直接的に対象とした実証的研究であり，第2は，「ケアによる発達」のメカニズムの検討という，より本質的な課題である。これらは，常に双方を視野に入れて，知見をやりとりしながら，相互に研究を深めていく必要がある。

特に，アイデンティティ生涯発達論から見た研究課題としては，次のような問題が重要であろう。第1は，「個としてのアイデンティティ」と「ケア」のバランスが，成人期のwell-beingにとって，重要な要因であることの実証的研究である。例えば，図1のそれぞれの領域へのウェイトのおき方や積極的関与の深さなどによって，いくつかのアイデンティティ様態が分類できる。これらの中で，バランスのとれた，つまり「個」の領域にも「ケア」の領域にも積極的関与の深いアイデンティティ様態は，精神的充足感や生活の質（QOL）などが高いことが推察される。さらに，循環的発達モデルにもとづいて成人期の発達をとらえる質的研究も重要であろう。おそらく“Generativity”

のレベルの高い人々は，この循環がうまく展開していると考えられる。

このような視点からの実証的研究を積み上げていくことにより，健康な成人の well-being を高めるのみでなく，育児・介護ストレスなどによる援助の必要な人々に対しても，発達を促進する適切な貢献が可能となるであろうと考える。

【引用文献】

Droter, D., Baskeiwicz, A., Irvin, N., Kennel, J. H., & Klaus, M. H. 1975 The adaptation of parents to the birth of an infant with a congenital malformation: A hypothetical model. *Pediatrics*, **56**, 710-717.

Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society*. New York: Norton.（仁科弥生 訳 1977，1980 幼児期と社会 1，2．みすず書房）

Erikson, E. H. 1964 *Insight and Responsibility*. New York: Norton.（鑪幹八郎 訳 1973 洞察と責任．誠信書房）

Franz, C. E. & White, K. M. 1985 Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, **53**, 224-256.

Gilligan, C. 1979 *In a Different Voice*. Boston: Harvard University Press.（岩男寿美子 訳 1986 もうひとつの声 川島書店.）

Heidegger, M. 1927 桑木務 訳 1961 存在と時間 岩波文庫.

Josselson, R. L. 1994 Identity and relatedness in the life cycle. In H. A. Bosma (Ed.) *Identity and Development: An Interdisciplinary Approach*. Thaousand Oaks: Sage.

金沢佳子 1993 わが子がかわいく思えない 日本放送出版協会.

柏木恵子 1995 親子関係の研究．柏木恵子・高橋恵子（編）発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房，18-52.

Kohlberg, L. 1981 *Essays in Moral Development* Vol.1.: *The Philosophy of Moral Development*. New York: Harper & Row.

厚生省 1996 厚生白書 平成8年度版．ぎょうせい.

牧野暢男 1996 父親にとっての子育て体験の意味．牧野カツ子・中野由美子・柏木恵子（編）子どもの発達と父親の役割．ミネルヴァ書房，50-58.

Mayeroff, M. 1971 田村 真 訳 1993 ケアの本質．ゆみる出版.

水野治太郎 1995 生涯学習内容とケアの問題．山本多喜司（編）新しい生涯学習社会の創造．（財）富士社会教育センター 教育総合研究所，28-31.

西平直喜 1996 生育史心理学序説 金子書房.

大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店.

岡本祐子 1994 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究．風間書房.

岡本祐子 1996 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究．日本家政学会誌，**47**，849-860.

岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版.

岡本祐子 1999 女性の生涯発達とアイデンティティ．北大路書房.

岡本祐子 2002a アイデンティティ生涯発達論の射程．ミネルヴァ書房.

岡本祐子 2002b 成人女性のアイデンティティおよび子育て意識に関する日中比較研究．日本家政学会誌，**53**，193-198.

杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し．発達心理学研究，**9**，45-55.

杉村和美 2003 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求 －2年間の縦断研究－（博士論文，未刊）

武田京子 1998 わが子をいじめてしまう母親たち．ミネルヴァ書房.

牛尾禮子 1998 重症心身障害児をもつ母親の人間的成長過程についての研究．小児保健研究，**57**，63-70.

柚木馥 1985 保育園・幼稚園と家庭．柚木馥・白崎研司（編）両親指導と家庭での指導．障害幼児の保育セミナー 第4巻，コレール社，8-24.

付記 本稿は，日本教育心理学会第45回大会シンポジウム「生涯発達から見たケアの意味」（企画・司会：大野久，話題提供：岡本祐子，大野久，西平直喜，指定討論：杉村和美）において行った話題提供「ケア論から成人期の発達をとらえる試み」をもとに，加筆したものである。